

構内居住者（職員、生徒及其の扶養家族を除く）宛

菅原弘、安川国男、安川良正、渡辺藏八、渡辺幸江、川村公
司、松下直、片山成一、片山正男、鳥居塚誠一、中村誠、上
田郁夫 計12

貴殿には豫てから本校構内に居住せられて居りますが右は学校運
営上支障がありますから住宅難の折柄寔に困難のことゝ存じます

科部 施設	日本画	油画	塑造	木彫	図案	彫金	鍛金	鍍金	漆工	建築	師範	合計
倶楽部	7	8	4	3	8	1	1	2			10(2)	44(2)
元道場		7	2	1	2			1	1		2	16
ラグザ記念館	4	2	2								1	9
建築科地下										6		6
元弓道場	1	1	1	2								5
工芸科倉庫					1			1	2			4
娯楽室							(2)		1			1(2)
工芸科小使室									3			3
旧版画教室									1	1		2
ラグビー小舎								2				2
元理髪店跡			1									1
其他(不明)	2										1	3
合計	14	18	10	6	11	1	3(2)	4	8	7	14(2)	96(4)

〔校内居住者及配給物資等調査一覧 生徒課〕による

が来る三月末日迄に校外に轉出せられる様右御通知致します

なお、同年五月現在の校内居住者数（生徒）は上の表のとおりであつた。

②0 大学昇格問題

敗戦による国家体制の破綻と連合軍司令部（GHQ）による支配は、わが国の教育に大改革をもたらした。変革の直接的契機となつたのは、GHQの要請によって来日したアメリカ教育使節団の二度にわたる報告書で、特に第一次報告（昭和二十一年三月末日）は、戦前の弊害を払拭して個人尊重の教育理念に立脚した民主的教養体制を樹立するための基本となつた。そして、二十一年八月には内閣に教育刷新委員会が設けられ、教育改革のための調査、審議が始められた。

アメリカ教育使節団の報告は高等教育の改革にも著しい影響を及ぼし、教育の機会均等、政府や官僚による支配からの解放という基本路線に沿った改革が進められ、戦前の高等学校、専門学校、師範学校、大学等を母体として新制高等学校と四年制の新制大学が設置されることになった。そして、新制大学の目的は、昭和二十二年三月公布の学校教育法に於いて「大学は、學術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の學芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させること」と定められた。

新制大学は、公、私立の一部が昭和二十三年度に、国立が翌二十四年度に発足した。東京芸術大学の発足も二十四年度であるが、

『上野直昭日記』を見ると、二十二年五月から大学設置に関する記述が現われ始める。本校側は上野直昭、村田良策、西本順が、また、東京音楽学校側は小宮豊隆、城多又兵衛が計画を練り、同年十月には両校を母体とする芸術大学を設立し、芸術高等学校を付設する案がまとまった様子である。同年十二月には各教室主任に対して校長から計画の説明がなされた。そして、翌二十三年四月には次の記事に明らかのように一般社会に対しても計画が公表された。

生れる芸術大学 音楽、美校を統合

東京音楽学校と東京美術学校を合せて新しい芸術大学を作る案は両校の間で話が推められていた、このほど一應の結論がに達したのでそれぞれ両校から具体案が文部省に提出された

それによると新大学の機構は音楽、美術両校を芸術大学の音楽部、美術部とするもので音楽部は第一類、作曲、和声、対位法の各科、第二類、声楽、オペラ、合唱の各科、第三類、ピアノ、オルガン、ハープ、絃楽打楽器の各科、第四類、指揮科、第五類、西洋音楽史、東洋音楽史、音楽理論、音楽学の各科、第六類、能楽、箏曲、長唄の各科（未定）

美術部は絵画、彫刻、工藝、建築、学藝の各科からなり音楽部では学部の外に三年制の東京音楽高等学校を附設することを望んでいる

この学校側からの案に對して文部省では音楽部を作曲、声楽、器樂、指揮、樂理の各科にまとめる案を提示、近く学校側、文部省両者の間で折衝して最後案を決定する、なお初代総長には現音楽

学校校長小宮豊隆氏が擬せられている。

（昭和二十三年四月二十二日『毎日新聞』）

② 石井教室事件

敗戦後間もない混乱の時期に、彫刻科塑造部に起こったいわゆる石井教室事件は、新聞に取り上げられたりしたため、世の注目を集めた。この事件は『日本美術年鑑』（昭和二十二年、二十六年版。美術研究所）にも、

〔昭和二十二年五月〕一〇日東京美術学校彫刻科学生によつて彫刻科石井鶴三教授反対の声明書が学校当局、文部省などに提出され問題となつたが、平櫛・石井二教室制が採用され、六月山本豊市・菊池一雄が迎えられて解決した。

と明記されている。本校の歴史上、かつて生徒がこのように強硬な教授排斥運動を引き起こした例はなかったから、これは極めて特異な事件であったと言えよう。敗戦後の時代的特色が色濃く反映した事件であったという点でも注目される。これについては種々の記録が現存し、また関係者の証言も得られたので、ここにその経緯を記す。

先ず、石井鶴三教授および笹村草家人助教は、既述のように昭和十九年改革によつて本校に赴任したが、その頃の彫刻科の様子を推測する手掛かりとして基俊太郎氏の文を引用する。

昭和十九年敗戦色濃く、上野の東京美術学校は上級生が学徒出陣、それを送り出す残った連中が東京駅の丸の内広場でヨカチン